

フロイトの「世界観」―「運命」と「断念」―(上)

飯 岡 秀 夫

FREUD'S discussion on "A WELTANSCHAUUNG" ―"Ananke" and "Renunciation"― (1)

Iioka Hideo

Summary

Freud named his own "world view (WELTANSCHUUNG)" a "scientific world view". What kind of "world view" is Freud's "scientific world view"? What characteristics does it have? What kinds of Problems lie in it? It is the primary theme of this paper to discuss such questions. Freud challenged idea struggles with the "scientific world view" which he was embracing against other "world views", which were dominant at his age, for example, "Marxist view of world", or "religious view of world" in particular. How did Freud criticize these "world views"? The second theme of this paper is to discuss it. This study is developed with two keywords of "destiny (Ananke)" and "renunciation".

目 次

序. 「運命」と「断念」

第1章 フロイトの「世界観」、その特質、その問題点

1. フロイトの「世界観」とその形成

- イ. 「科学的世界観」とはどのような「世界観」か
- ロ. フロイトに於る「科学的世界観」の形成

2. 「科学的世界観」の特質

- イ. 特質1. 「世界の統一的解釈」の不可能性
- ロ. 特質2. 「啓示」、「直覚」、「予覚」の排除
- ハ. 特質3. 「科学的真理」の微弱性
- ニ. 特質4. 「価値自由」な精神態度の要請
- ホ. 特質5. 魂に慰藉あるいは高揚をもたらすことができないもの

ヘ. 特質6. 現実的外界への依存性

3. フロイトの「(科学的) 世界観」の問題点

イ. 特質7. 「決定論的世界観」

ロ. 特質8. 「科学的世界観」の理念・目標——「情動的断念」から「知性による断念」へ——

ハ. 「科学的世界観」の問題点 (以上本号)

第2章 「マルクス主義的世界観」批判 (以下次号)

1. マルクス主義の補足

2. 実践的マルクス主義(ボリシェヴィズム)批判

第3章 「宗教的世界観」批判

1. 「宗教的観念」生成の論理——「宗教」は幻想である——

イ. 「運命」の圧倒的暴威

ロ. 「寄辺ない状態」——「父親(両親)」という「最高権力者」——

ハ. 「運命→神」という「最高権力者」

ニ. 「宗教的観念」の生成とその「幻想」性

2. 「宗教」の本質は「神経症」である

3. 宗教は「知性優位の人間」育成——「情動的断念」から「知性による断念」への転換——を妨げるものである

4. 「共同生活(文明)」の要求(殺すな、盗むな etc.)の基礎に「宗教」を置くのは危険である

第4章 「情動的断念」から「知性による断念」へ——「知性優位の人間」の育成——

1. 「技術的理性」の能動性

2. 「倫理」の情動性と能動性

3. 「知性優位の人間」の育成——「情動的断念」から「知性による断念」へ——

結び. 「われらの神口ゴス」の行方

序. 「運命」と「断念」

フロイトは自らの「世界観」を「科学的世界観」と呼んだ。

フロイトの「精神分析」および「文明論」の体系——「天地宇宙」観から始まって「生命(生物)」観→「本能論」→「人間論」→「文明論」に至る体系⁽¹⁾——はその「科学的世界観」によって支えられている。「精神分析」と「文明論」の体系を支えるフロイトの「科学的世界観」とは、そも、どのような「世界観」なのか。それはどのような特質をもち、そこには、どのような問題が介在しているのか。これを論ずることが本稿の第1の主要テーマである。

フロイトは彼の奉ずる「科学的世界観」をもって、彼の時代に優勢であったその他の「世界観」——たとえば「マルクス主義的世界観」なканずく「宗教的世界観」など——に思想闘争をかけている。何故ならそれらの「世界観」なканずく「宗教的世界観」は「人類に好意を寄せる者」

(1) 参考文献〔XV〕、P. 2を参照のこと。本稿もまた参考文献〔XV〕および参考文献〔XVI〕とならぶ、「フロイトの文明論」を論ずるための基礎研究論文に位置する。

フロイトとしては看過すべからざる——心が痛んで克服せずにはおれない——ものであったからである⁽²⁾。フロイトはこれらの「世界観」をいかに批判したか。これを論ずることが本稿の第2のテーマである。

「科学的世界観」は、本論で論ずるように、本来、人生の目的——我いかに生きるべきか——については何ら語ることができないことをもってその特質としている。しかし、それにもかかわらず「科学的世界観（あるいはフロイト）」は人によりよく生きるための知恵として次の2点だけは密かにすすめている。「運命」に従順であれ、「断念」することを覚えよ。そうすれば苦難に満ちた「文明」⁽³⁾生活で、少しはましな人生がおくれるであろうと。

「運命」とはフロイトの決定論的な「世界・人間認識」——人間とは、自分にはあずかり知らぬ、外界にうごめくデモニッシュな力と内界にうごめくデモニッシュな力に翻弄されて、生き死んでいくことを余儀なくされている存在であるという認識⁽⁴⁾——にかかわる言葉である。「断念」とは本能に発する欲動の「断念」を意味し、それは、人間の「文明生活」の始源・根源である「倫理」の発生にかかわる言葉である⁽⁵⁾。

フロイトの「(科学的)世界観」の根底には以上の「運命」と「断念」という二つのキーワードが息づいている。本稿はこの二つのキーワードのもとに展開される。

第1章 フロイトの「世界観」、その特質、その問題点

1. フロイトの「世界観」とその形成

イ。「科学的世界観」とはどのような「世界観」か。

フロイトが信奉する「科学的世界観」というのは「科学（的真理）」の上に構築される「世界観」である。ここで「(科学的)真理」というのは「現実との一致ということによって特別扱いされている知識」（参考文献〔I〕、Ⅰ、P. 531～2）、つまり、「外界」と「内界」に現存する経験的「事実」——「自然（社会）現象」および「心理現象」——とその「(知覚・)認識」の一致を意味し、それはあくまで科学的研究の到達目標とされているものである⁽⁶⁾。

「科学」が「真理」に到達するためには、まず何よりも、「認識」の源泉から「啓示」、「直覚」、「予覚」といった魔術的なものを厳しく排除しなければならない。何故ならそれらに基づく認識は、

(2) 「人類に好意を寄せている者としては、大部分の人間は永久にこの種の人生観を脱することはできないだろうと考えるだけでも胸が痛む思いである」（参考文献〔Ⅲ〕、③、P. 439）。

(3) フロイトは「文化（Kultur）」と「文明（Zivilisation）」とを区別する必要を認めていない。参考文献〔Ⅱ〕、③、P. 363を参照のこと。フロイトの「文化（Kultur）」概念のなかには「文明（Zivilisation）」概念のすべてが包摂されている。それ故本稿では「文化・文明」にかかわるすべてを「文明」概念をもって代表させることにする。

(4) 詳しくは参考文献〔Ⅳ〕を参照のこと。

(5) 本論で論ずるように、フロイトは「欲動断念」→「倫理」の発生の上に「文明」は築かれているとみている。たとえば次の言葉をみよ。「文化の相当部分が欲動断念の上にうちたてられており、さまざまな強大な欲動を満足させないこと（抑圧、押しのけ、あるいはその他の何か？）がまさしく文化の前提になっていることは看過すべからざる事実である」（参考文献〔Ⅲ〕、③、P. 458）。

(6) 「科学的精神は現実との一致に到達することを志向します。すなわち、われわれの外部にわれわれとは独立に存立し、経験がわれわれに教えるところでは、われわれの願望の実現が一に懸かってそこにあるところのもの（現実）との一致に到達しようとするのです。このような現実的外界との一致をわれわれは真理と呼びます。真理はあくまでも科学体研究の目標なのです。」（参考文献〔Ⅰ〕、Ⅰ、P. 526）。

「真理」の対極にある、「幻想」あるいは「錯覚」以外の何ものでもないからである。諸観察の知的加工つまり研究とよばれるもの以外には「真理」に至る「認識」の源泉はないのである⁽⁷⁾。

「真理」をめざす「科学的研究」は、まず、経験的「事実」の「観察」から始められる。「観察」によってここかしこで新しい事実が発見され、「事実」に関する確実な「知」が確認される。最初のうちはそれらの事実のひとつひとつは互いにくっつき合わない。推測がなされ、補助構成が作られるが、実験あるいはそれに類するものによって確証されない場合には撤回されることになる。この努力の積み重ねのうちに、発見された時はばらばらであったものが、「因果関連」、あるいは「法則」としてつなぎ合わされていく。つまり「科学」は知覚の確実性を基礎にして推論をたて、日常の手段では得られないような新しい知覚（科学的仮説）を作り出しつつ、科学は「真理」に一步一步近づいていくのである⁽⁸⁾。

かくして経験的「事実」と「(知覚・) 認識」との一致としてある「(科学的) 真理」は「科学的仮説」として仮設されるのだ。

フロイトのいう「科学的世界観」というのはこのような「科学的真理（仮説）」の上に構築される「世界観」なのである。

ロ. フロイトに於る「科学的世界観」の形成

フロイトの信奉する「科学的世界観」は、フロイト自身の規定に従えば、「科学の上に」築かれるべき世界観であるはずだ。そうだとするとただちに次のごとき疑問が生じてくる。それではフロイトは自分自身の「世界観」を、「科学の上に」、つまり、フロイトの時代にたどりついた最高の「科学的真理」にもとづいて、それを自分なりに再構成して、構築したものなのであろうかと。

たしかにフロイトは、彼の時代にはもはや取り壊してしまうことができない「真理」の1階部分はできあがっていると⁽⁹⁾、彼の時代に至る「真理」の発見を高く評価し、科学によって発見された「真理」にもとづいて、自己の世界観を構築する姿勢を示してはいる。しかしフロイトは、同時に、このあとすぐ論ずるように、「科学」をもって「統一的な世界観」を構築することは不可能であるということも知っている。「科学的真理」を統一する、究極の価値理念がないかぎり、「科学的世界観」は構築できないのだ。

そういうわけで、フロイト自身が所有する「(科学的) 世界観」は「科学の上に」、つまり、「科学的真理」をひろい集め、それを再構成して、そのみに依拠してつくりあげたものでは勿論ない。フロイトの「科学的世界観」は、他の一般人のもつ「世界観」の場合と同様、フロイト自身の実人生のなかで、フロイトの概念装置を使えば、まずフロイトの「超自我」として形成され、次いでフロイトの「自我」がそれをひきうける過程、つまりフロイトの究極の価値理念の形成にともなう自我同一性の確立の過程で形成されたとみなしなければならないのである。

(7) 「慎重に調べ上げられた諸観察の知的加工、つまり研究と呼ばれるもの以外に世界認識の源泉は存在せず、そこには啓示や直覚や予覚などによる知識の存在する余地はないのです。」(参考文献〔I〕、Ⅱ、P. 516)。

(8) 以上の論述については参考文献〔I〕、Ⅱ、P. 526およびP. 529を参照のこと。

(9) 「ある程度完成している諸科学においては、すでに今日では堅固な一階ができ上がっていて、その部分は、模様がえや建て増しならとにかくとしても、もはや取り壊してしまうことはできないのです。」(参考文献〔I〕、Ⅱ、P. 530)。

フロイトの実人生のなかでの「科学的世界観」の形成——フロイトの実人生に於る「超自我」の「自我」によるひきうけ→究極の価値理念の形成にともなう自我同一性の確立——に於て決定的に大きな役割を果たしたのは、フロイトのいわば「ユダヤ人体験」と呼ばれるべきものと、フロイトを育んだ「時代精神」である。

まずフロイトの「ユダヤ人体験」からみていくことにしよう。

フロイトは『『固くむすんだ多数者』から仲間はずれにされるという運命を身にしみてうけとめて生きる』ことを余儀なくされているユダヤ人である。フロイトは述懐して次のようにいっている。「そんな仲間にはいることがなくとも、熱心に協力さえしてゆくならば、人類という埒内においてならば、働き場所が見つかるにちがいないというのが私の考えであった。」（参考文献〔VI〕、〔4〕、P. 424）。

「固く結ばれた」、宗教的・国家的「多数者」集団のなかで、個の自立と自由をまもり、さらに、そのような「多数者集団」を超えて「人類という埒内」に入り、そこで力を発揮するためには、「知性（科学的精神・理性）」という力以外にたよるものがない。ここにユダヤ民族独自の歴史のなかでつちかわれた、「知性（科学的精神・理性）」尊重というユダヤ民族の「気風（超自我）」→アイデンティティが形成される。

フロイトは若き日に経験したさまざまな「ユダヤ人体験」という苦渋から、このユダヤ民族に固有の「気風（超自我）」→アイデンティティをユダヤ人としてわかちもち、「理性こそは最高の法廷である。……自分の理性を使えという要求は万人にできる」（参考文献〔II〕、〔3〕、P. 381）という確信をもつに至る。そしてその「知性（科学的精神・理性）」に対する信頼と期待——「知性」こそ「人間と人間とを結び合わせる最強の紐帯」であり、それは「人類」というさらに大きな統合の道をひらいてくれる力だという信頼と期待——を次の言葉をもって表明するのである。

「知性——科学精神、理性——がやがては人間の精神生活における独裁権を獲得する日がくるであろうということは、われわれの最善の未来の希望なのです。……理性のこのような支配から生ずる一般的な強制は、人間と人間とを結び合わせる最強の紐帯であるということが判明して、そこにさらに規模の大きい統合の道をひらいてくれることでしょう。」（参考文献〔I〕、〔1〕、P. 527）。

フロイトの「知性（科学的精神・理性）」尊重にもとづく「科学的世界観」はフロイトの実人生に於る、以上みてきたとき「ユダヤ人体験」を通じての、「宗教的・国家的偏見」からの自由と「知性尊重」というフロイトのユダヤ民族的アイデンティティの確立のなかで形成されたのである。

次に、フロイトの「超自我」の形成→そのアイデンティティの確立→その「科学的世界観」の形成に大きく貢献した、もうひとつの要素、つまり、フロイトを育成した「時代精神」についてみておくことにしよう。

フロイトは1860年4才の年にウィーンに移り住み、1866年にウィーンのギムナジウムに入学し、1873年にウィーン大学医学部に入学し、1876年ウィーン大学医学部のブリュッケ教授の生理学研究室に入っている。つまりフロイトはウィーンで育ち、ウィーンで青春時代をおくり、ウィーンで思

想形成をなしたといえるのである。若きフロイトを育成した「時代精神」は、当時ウィーンをおおっていた、ウィーンに於る産業資本主義の興隆→近代国家の形成に対応する、「啓蒙思想」である。フロイトはウィーン啓蒙期の合理主義的な「時代精神」のもとに自己のアイデンティティを確立し、「啓蒙思想」の申し子としてそれをつらぬく「科学的世界観」を身につけた。

若きフロイトはフォイエルバッハを愛読しその唯物論哲学をわがものになっている。また医学生時代の恩師ブリュッケからは唯物論的生命観とダーウィンの進化論を学んだだけではなく、なかんずく恩師の「実証主義的精神態度」をわがものになっている。つまりフロイトは「フロイトが学生だった頃、ウィーン大学もまた実証主義者たちの支配下にあった」（参考文献〔Ⅻ〕、P. 40）という状況のなかで、ブリュッケに代表されるウィーン実証主義者の「科学的世界観」をそっくりそのまま継承したといえるのである。

フロイトの主知主義的な「科学的世界観」は、以上論じたごとき、フロイトの「ユダヤ人体験」とフロイトを育成した「時代精神」とのフロイトに於る合流の上に形成されたのである⁽¹⁰⁾。

2. 「科学的世界観」の特質

フロイトは「世界観」なるものを、「ある上位の一仮定」（天地宇宙の究極に存在するもの、たとえば「神」のごときもの）から世界事象のいっさい（「現存在の一切」）の問題を統一的に解決する知的構成物であると規定している⁽¹¹⁾。そしてこの「世界観」を信奉することによって、人は、安心感を得ることができるし、人生の目的を知りそれにむかって情熱と関心をささげることができるといっている⁽¹²⁾。「世界観」なるものを以上のように解釈する時、その解釈に於てフロイトが強調しているのは、世界事象のいっさいを統一的に解決する拠点たる、「ある上位の一仮定」なるものは、科学的真理に基づいてではなく、人間の「理想・願望」に発して仮設されたものだとしている点である。そしてさらに世界の統一的解釈の拠点たる天地宇宙の究極にあるもの（「ある上位の一仮定」）が「理想・願望」に発して仮設されているかぎり、その「世界観」は「幻想」であるとい切っている点である。

「つまりわれわれは、願望実現ということが主要動機になって生まれた信念を幻想と呼ぶのであって、現実との関係がどうなっているかは—幻想自体も自分が証明されることを要求していないのと同じく—あえて問題にはしないのである。」（参考文献〔Ⅱ〕、〔Ⅲ〕、P. 384）。

フロイトの「（科学的）世界観」はこのような「幻想」をいっさい拒否・排除することを根本の

(10) フロイトに於る「科学的世界観」の形成については、参考文献〔Ⅻ〕に詳しく論じられている。特にそのP. 295～P. 298を参照のこと。

(11) 「私の考える世界観とは、われわれの現存在の一切の問題を、ある上位の一仮定から統一的に解決する知的構成物であり、従ってその中では未解決の問題は皆無であり、およそわれわれの関心を惹くものはすべてその中にしかるべき位置を占めている底(てい)のものなのです。」（参考文献〔Ⅰ〕、〔Ⅱ〕、P. 515）。

(12) 「そういう世界観を信ずることによって、人間は人生において安心感を得ることができますし、何をしようとするべきか、どうすれば一番目的にかなうように自分の情熱と関心を投入することができるかを知り得るのです。」（参考文献〔Ⅰ〕、〔Ⅱ〕、P. 516）。

特質とする。つまりフロイトの「(科学的) 世界観」の根本的特質は、世界の統一的解釈の拠点たる「ある上位の一仮定」を願望に発する幻想によって仮設することを拒否・排除し、そこに、現実存在の科学的加工のみによって、一步一步近づいていこうとするところにある。

以下、フロイトの「(科学的) 世界観」の特質を、ひとまず6点に要約し、さらに詳しくみていくことにしよう。

イ. 特質1. 「世界の統一的解釈」の不可能性

「科学的世界観」は現実の科学的加工によって「その時点において知り得ること以外には一步も外にふみ出さない」ことをもってその特質としている。何故なら、科学的真理をこえて、あえて一步をふみ出すことは「幻想」の世界へ突入することを意味するからだ。そのことは、「科学的世界観」は、原理的に、あるいは少なくとも今の時点では⁽¹³⁾、世界の統一的解釈の拠点たる天地宇宙の究極的存在にたどりつけないことを意味する。それ故「科学的世界観」は天地宇宙の究極的存在から世界を統一的に解釈することができない、つまり、それは世界生起とその運命を原理的に説明することができないし、「ある上位の一仮定」から統一的な世界像を知的に構成し、それから現存在のいっさいの問題を統一的に解決することができないものとされるのである。

ロ. 特質2. 「啓示」、「直覚」、「予覚」の排除

「科学的世界観」は「世界認識の源泉」として「諸観察の知的加工（研究）」のみを認め、「世界認識」の源泉から「啓示」や「直覚」や「予覚」といったものを「錯覚（情動的要求の所産）」あるいは「幻想（願望の所産）」として排除する。そこには「啓示」や「直覚」や「予覚」などによる知識が存在する余地はないのである⁽¹⁴⁾。

ハ. 特質3. 「科学的真理」の微弱性

しかも「諸観察の知的加工」によってやっとたどりついた「科学的真理」はあくまで「仮説」とどまり必ずしも「真理」であるとはかぎらない。「真理」（「現実」と「認識」の一致）として仮説されたものが、しばしば「誤認」（「現実」と「認識」との不一致）としてくつがえされることがあるのだ。それ故、科学に対して次のような非難があげられる。「科学の教えるところのものはすべて一時期通用するにすぎない。」今日の最高の知恵がただちに他のものにとりかえられてしまう。そして、「最後に残った誤診が真理と呼ばれるのだ」（参考文献〔I〕、[1]、P. 528）⁽¹⁵⁾と。

ニ. 特質4. 「価値自由」な精神態度の要請－特質2. の帰結－

(13) 天地宇宙の究極的存在（「ある上位の一仮定」）に科学はたどりつけるのか。それを「真理」として、科学は示しうるのか。フロイトは、それが原理的に不可能だと考えているのか、それとも今の時点ではできないと考えているのか。本稿1章3. および4章で論ぜられる、フロイトの「科学的世界観」の問題点にかかわる問題である。フロイトが原理的に不可能だと考えていたかどうか、あるいはまた、現時点では不可能でも、いつかはきっとたどりつけると確信していたかどうかは、筆者には判じかねるが、次の2点だけは確実だと思われる。1. 科学的真理として示されたものではないけれど、従って、「直覚」あるいは「靈感」といったものでつかみとったものであろうけれどもフロイトは天地宇宙の究極的存在（「デモニッシュな力」あるいは「運命の力」の存在）を信じていたこと。2. 科学的加工はいずれ、かぎりなく近くにまで、「真理」に、接近できるであろうと確信していたことこれである。このことは、後に論ぜられる。

(14) 注（7）の引用文を参照のこと。

(15) このような批難に対してフロイトは、一方に於て、「われわれはある程度までその正しさを認めざるを得ません」と、科学的真理の微弱性を認めてはいる。しかし、他方に於て、とりこわしてしまうことが決してできない、「真理」の「堅固な一階はすでにできあがっている」（注（9）の引用文を参照のこと）と、科学的真理の確実性に大きな信頼を寄せているのである。

「諸観察の知的加工」のみによって「真理」に到達しようとする「科学的世界観」の持主には、マックス・ウェーバーのいう「価値自由」な精神が要請される。彼は「情動→錯覚」や「願望→幻想」を自己の認識から排除するために、「個人的な因子や情動的な影響を注意深く遠ざけるよう努めなければならない」（参考文献〔Ⅰ〕、〔Ⅱ〕、P.526）のである。

ホ．特質５．魂に慰藉あるいは高揚をもたらすことができないもの—特質１．の帰結—

世界生起とその運命を説明できず、かつまた、統一的世界像を描くこともできない「科学的世界観」は、そのために、「科学的世界観」の持主に、人生の目的—我いかに生きるべきか—を示して魂を高揚させることができないし、そこに憩うことによって魂に安らぎや慰めを与えることもできない。「科学的世界観」の持主には、他の「幻想」にもとづく「世界観」の持主のように、「世界観」というやわらかな布団に安らうことは原理的に許されておらず、つづいて第１章３．と第４章で論ずるように、「断念」にもとづく覚醒した「倫理」的生活のなかで、かろうじて「文明人」としての品位を保ち、消極的な「安らぎ（人生苦の緩和）」を得ているにすぎないのである。

ヘ．特質６．現実的外界への依存性

フロイトは「科学の上に築かれる世界観は、現実的外界を強調する」（参考文献〔Ⅰ〕、〔Ⅱ〕、P.536）とか「科学をどんなに貶めたところで、われわれが現実的外界に依存しているということを科学が正当に評価しようとしている事実は微動だにしません」（参考文献〔Ⅰ〕、〔Ⅱ〕、P.530）という言葉で、人間存在とその営為としての科学の「現実的外界への依存性」を強調している。この強調は、フロイトの「科学的世界観」を支える次の二つの基本認識—ひとつは人間存在は現実的外界から生起したものである、それ故、現実的外界の力つまり「運命」に支配されてしか生きられない存在である、という認識、他のひとつは「真理」は現実的外界のなかにのみある、それ故、科学的加工をもって一步一步あゆむ以外、「真理」に近づく術はないという認識—の表明である。そして、人間存在（その肉体的・心的活動）というものが現実的外界に依存しているという認識は「真理」である、ということを土台にすえる現実的外界への依存性の強調は、フロイトの「科学的世界観」の根底に横たわる「決定論的世界観」に一直線につらなっていくのである。

以上、フロイトの「科学的世界観」の特質を、とりあえず、６点にまとめて示したが、実は、フロイトの「(科学的)世界観」の究極の特質はその根底に横たわる次の２点—特質７．と特質８．—にあり、その２点の究極の特質のなかに、フロイトの「(科学的)世界観」の問題が潜んでいるのである。次にその問題を論じよう。

３．フロイトの「科学的世界観」の問題点

フロイトの「(科学的)世界観」の根底には以下に論ずるが如き「決定論的世界観」（特質７）が横たわっている。他方、それにもかかわらず、フロイトの「(科学的)世界観」が理念・目標とするところは、それに続いて論ずるがごとき、「情動的断念」の「知性による断念」への転換にある（特質８）。はたして「決定論的世界観」の下で、「情動的断念」の「知性による断念」という、こ

の「科学的世界観」の理念・目標は達成されるのか。別言すれば、「決定論的世界観」を根底にすえるフロイトの「精神分析」をもって、「情動的断念」の「知性による断念」への転換というフロイトの理念・目標は実現可能だとされるのであろうか。ここにフロイトの「(科学的)世界観」の根底に横たわる根本問題が潜んでいる。以下そのことを論じよう。

イ．特質 7．「決定論的世界観」

フロイトは、「世界生起には意味がない、世界はカオスだ。従って、世界の統一的解釈など、原理的に不可能だ」とは考えていない。フロイトは「世界の統一的解釈」ということについて、次のようにいっている。

「世界解釈の統一性¹⁶ということは、なるほど科学的世界観によっても採用されはしますが、しかしそれはただ綱領としてだけのことであり、その実現は将来へ延期されています。」(参考文献〔I〕、Ⅰ、P.516)。

将来に延期されているとはいえ、世界の統一的解釈ということは「科学的世界観」によっても将来のプログラムとして採用されている!!。ここにフロイトの「(科学的)世界観」の根底に横たわる「決定論的世界観」が顔をのぞかせることになる。

将来に延期されているとはいえ、フロイトにあって、科学によって統一的に解釈されうる「世界」とは、それでは、どのような「世界」なのであろうか。

いつの日か科学によって統一的に解釈されうるとされているのであるから、「(科学的)世界観」が仮定する「世界」は、まず何よりも、コスモスの世界であることにまちがいが無い。

フロイトにあってコスモスとしてとらえられて（仮定されて）いる「世界」は、次いで、「因果連関の網の目」で構成されている「世界」でもある。「物質（無機）的世界」のみならず「生命（有機）的世界」、さらには、内面の「心的世界」に至るまで、すべての世界現象は因果律で結ばれており、それ故、それらの現象はすべて科学によって因果連関的に把握可能だと仮定されている。たとえば心理機能の低下による「錯誤行為」は一見「偶然」にみえる。しかしフロイトは一見「偶然」にみえてもそれは必ず無意識的な動機によって決定づけられている⁽¹⁶⁾、それ故、一見「偶然」にみえる「錯誤行為」も科学的加工によって必ず因果連関的に把握され、意味づけられる、と「心的現象」の領域に於てすら、「偶然」の存在を排除しているのである。それが「心的現象」を観察・分析しての、フロイトの結論（仮定）であったのである。

「世界」を「因果連関の網の目」としてとらえ、そこに於る諸現象から「偶然」を排除したフロイトは、さらに、人間の「自由意志」ですら、人間意識に於るその存在——「自由意志」による意識的動機づけ——を認めても、究極的には無意識的な動機によって決定づけられていると結論（仮

(16) 「われわれの心理機能のある種の低下とその一見偶然かに見えるある種の変化は、精神分析の方法を適用して検討してみると、明らかな動機があり、しかも、意識には知られていない動機によって決定されていることが分かる」(参考文献〔X〕、Ⅳ、P.204)。

定)する⁽¹⁷⁾。

かくしてフロイトの「(科学的)世界観」にあつては「世界」を「因果連関の網の目」で構成されたコスモスなりとする仮定の上に、さらに、それを支える上位の仮定がつけ加えられることになる。それは「因果連関の網の目」の背後には「究極の力・動因」が存在し、それが、世界の諸現象を因果連関的に決定づけているという仮定、フロイトのいう「ある上位の一仮定」である。

「世界」にはそれを支配する決定論的因果律の「網の目」がはりめぐらされている。もしある人が「偶然」ということを認めてその「網の目」のひとつでも破るようなことがあるならば、それは、「科学的世界観」の放棄につらなるとして、フロイトは、その人物を激しく非難して、次のようにいっている。

「それはちょっとした偶然といったもので、それ以上なんの説明の必要があろうか、と。こういう返事をするこの人は一体どういうつもりでいるのでしょうか。世界の諸事象の関連性からはずれていて、あってもなくてもいいようなささいな事象があると主張するつもりなのでしょうか。もし、このように自然界の決定論をどこかただの一点でも破るようなことをするならば、科学的な世界観は放棄されてしまうことにもなります。神の意志が働かなければ、一羽の雀も屋根から落ちもしない、と断じた宗教的世界観の方がどれほど首尾一貫しているかを、そういう人に指摘してやればいいのです。」(参考文献〔IX〕、①、P.19～20)。

「宗教的世界観」に於る「神」のごとき「究極の力・動因」が自然界の背後にあつて、それが人間の心的世界を含む全世界の諸現象をつらぬく因果律を決定している。これがフロイトの「(科学的)世界観」の根底に横たわる「決定論的世界観」なのである。以上のようにフロイトの「(科学的)世界観」もまた「ある上位の一仮定」を仮設しているのである。

それではフロイトにあつて世界の諸現象の因果連関を決定づけている「ある上位の一仮定」——「究極の力・動因」——とは何なのであろうか。

「デモニッシュな力」、つまり、「無情で冷酷で正体の解らぬ力」、「運命(アンナケ)の力」がそれである⁽¹⁸⁾。あるいはまた天地宇宙に充満する、物理・科学的エネルギー(→生命的エネルギー→心理的エネルギー)といってもいい。

この「デモニッシュな運命の力(物理・化学的エネルギー)」が決定論的因果連関に於て「生命体」とその「本能(生命エネルギー)」を生み、さらに、「生命体」の有する「生命エネルギー」は決定論的因果連関に於て「エス」を通じて人間の「心的装置」に入りこみ、「心的エネルギー」となって人間の「内面世界」をかけめぐる。かくして人間は外側と内側とからこの「デモニッシュな運命の力(物理・化学的エネルギー→生命的エネルギー→心的エネルギー)」に翻弄されることになるのである⁽¹⁹⁾。

(17) 「多くの人々が、徹底的な心理的決定論を唱えることに反対して、自由意志の存在を確信させる特殊な感情があると主張している。この確信的な感情は事実存在しているしまた、たとえ決定論を信じたとしても退くものではない。しかし、このように一方からは自由になったとしても、他方、すなわち、無意識からの動機づけは受けており、かくて、われわれの心理過程はあますところなく動機づけられているわけである。」(参考文献〔X〕、④、P.216)。

(18) 「無情で冷酷で正体の解らぬ力が人間の運命を決定するのです。」(参考文献〔I〕、①、P.523)。

(19) 以上については、筆者はすでに詳論しておいた。参考文献〔XV〕および参考文献〔XI〕を参照のこと。

この「デモニッシュな力・アナanke」は人間（生命体）に「外部からの苦難」を与える力である。人間（生命体）は「外界」に適合すべく、この苦難に立ちむかうことを余儀なくされている。人間が労働をもってこの「外部からの苦難」に立ちむかい、さらにそこに、「エロス（愛）」の共働が加わる時、そこに「人類の共同生活」つまり「文明」が生誕することになる⁽²⁰⁾。

フロイトの「(科学的)世界観」の「決定論」に支えられた理念・目標はこの「文明」の生誕とその進歩・発展のあり方にかかわるものなのである。

ロ．特質8．「科学的世界観」の理念・目標－「情動的断念」から「知性による断念」へー

「科学的世界観」の持主フロイトの理念・目標は人類の個と類がよく本能に発する欲動を「断念」することに成功し、最初の「情動的断念」を「知性による断念」へと置き換えていくところにある。それに成功してはじめて人類は「文明生活」のなかで「文明の重圧」からのがれて人間らしい生を全うすることができるのだと、「人類に好意を寄せる者」としてフロイトは、そう確信しているのだ。ところで、「情動による断念」の「知性による断念」への転換とは何を意味するか。以下そのことを中心に「科学的世界観」の理念・目標を論ずることにしよう。

フロイトに従えば「人間生活」を「動物生活」と区別する「文明」は「運命（アナanke）」に立ちむかう「労働」と「欲動充足の断念・放棄」とによって獲得されたものである⁽²¹⁾。

人間の最古の、そして根源の欲動願望は「近親相姦」と「食人」と「殺人」である。人間の「共同（文明）生活」のためには、まずは、これら根源の、それだけに強烈な、欲動願望の充足を「断念・放棄」しなければならない。「文明のための断念」が要請されるのだ。

しかし「殺人」や「近親相姦」の禁止という「文明の禁令」は合理的思考から生まれたのではない。知性のいまだ発達していなかった人類は当初この「断念」（正確に言えば「抑圧」）を「情動的」に、つまり、「純感情的な力」のなかでおこなったのだ。個体発生的に個体の成長史に即していえば幼児期における「エディプス・コンプレクス」の解消と「超自我」の発生の過程が、系統発生的に人類の歴史に即していえば「トーテミズム」の形成にともなう「タブー」の発生——「原父家族」→「父親殺し」→「兄弟家族」の形成——過程がそれにあたる。幼児の「エディプス・コンプレクス」という心の葛藤が「超自我」という道德律を個の内面世界に形成せしめたように、人類の原始時代に子供たちの「エディプス・コンプレクス」からなされた「父親殺し」という歴史的行為⁽²²⁾は「罪責感」の形成のもとに殺人と近親相姦の禁止という人類最初の道德律を形成したのである。個と類とのそれぞれのレベルでなされた欲動の「断念」は、以上のように、そっくりそのまま、「倫理」の発生につらなったのである。フロイトに従えば文明の進歩とは「断念」の拡大→「倫理」の発展に他ならないのだ。

(20) 「人類の共同生活は、外部からの苦難によって生まれた労働への強制と、愛の力という二重の楔によって生まれたのだ。

すなわち、エロス（愛）とアナanke（宿命）は、人間文化の生みの親ともなったのだ。」（参考文献〔Ⅲ〕、③、P.460）。

(21) 「フロイトの文明論」の基礎をなすこのテーゼは、フロイトの著書のあちこちで顔を出す。たとえば参考文献〔Ⅱ〕、③、P.364～5を参照のこと。

(22) エディプス・コンプレクスとそれに発する「父親殺し」という歴史的事実の意味と意義については、筆者はすでに詳論しておいた。参考文献〔Ⅳ〕、第3章を参照のこと。

しかしフロイトは個と類との幼児期でなされる「純感情的な力」による欲動の「断念」は「神経症的段階」にとどまるものと論じている。何故なら「純感情的な力」による「断念」は実は「抑圧 (Unterdrückung, suppression)」を意味するからである。それによって欲動が完全に放棄されるとはかぎらないからである。「断念・放棄 (Verzicht, renunciation)」に失敗した、抑圧された欲動が、そのままナマのままで残存するか、あるいは、神経症の症状となってたちあらわれるかの可能性が残されているからである。

ここに「ハンスの事例」が登場する。フロイトは幼少の頃神経症の症状を示したハンス少年が、その人生行路のなかで、文明生活を担う、自我を確立した、立派な「見るも頼もしい」青年に成長した事例を知っている。この「ハンスの事例」が見事に示す、「神経症的段階」から「文化の担い手」への脱皮・成長 (参考文献〔Ⅻ〕、〔Ⅸ〕、P. 455～6を参照のこと) は何によってなされたのか。

「知性 (科学的精神、理性)」の力によってである。「知性」の力によって、はじめて、欲動の断念は完成するのだ。フロイトは「知性優位」という「心理学」の理想の根拠を次の言葉で語っている。

「自分の欲動性を制御するにあたってわれわれが持っている唯一の武器は知性である。」 (参考文献〔Ⅱ〕、〔Ⅲ〕、P. 397)。

かくして「科学的世界観」の理念・目標に「情動的断念」の「知性による断念」への転換ということがすえられることになる。このような理念・目標をもつ「科学的世界観」の前に大きくたちはだかり、その理念・目標の実現をさまたげているのが、いまだ幼児的な「神経症」の段階にある「宗教的世界観」である。フロイトの「宗教的世界観」批判のポイントはその点にあるのだが、そのことについては第3章で詳論することにしよう。

ハ．「科学的世界観」の問題点

上述した特質7．と特質8．の間にはフロイトの「(科学的) 世界観」の奥底に横たわる二つの問題が潜んでいる。そのひとつは、科学的加工をもって決定論の根拠たる「ある上位の一仮定」の内実をとらえ、それを根拠にすえて統一的な世界像を描くことがはたして可能なのかという問題であり、他のひとつは、「決定論的世界観」のなかで「情動的断念」からの「知性による断念」への転換の契機はどこにあるのかという問題である。

第1の問題の内容をもう少し詳しく論ずるならば、科学的加工による「真理」への接近はいずれもっと綿密になされた接近によってとってかわられ、それはまたさらに、さらに綿密になされた接近によってとって代わられるという運命にあるのだから、いつまでたっても「ある上位の一仮定」には常に「大いなるX」⁽²³⁾ がつきまとうということになり、ということは、「われわれの外にある事物の本当の性質は科学の手のとどかぬところにある」 (参考文献〔Ⅱ〕、〔Ⅲ〕、P. 404)、というこ

(23) 「大いなるX」というのは、科学的「真理」がいきとどかぬ「不可思議」の領域をいう。科学は仮説を仮設して、「大いなるX」の解明、つまり、「真理」の発見にむかっているのだが、科学によって「大いなるX」を解明しきすることは、原理的に不可能なのである。なお詳しくは参考文献〔Ⅻ〕、の序、「大いなるX」の探求—「精神分析学的思考圏」—の個所を参照のこと。

とになるのであるから、従って科学の名をもって「統一的世界像」を描くことは原理的に不可能なのではないか、という問題である。

この第1の問題についてはフロイトの次の結論を簡単に示すだけにとどめておいて、本稿ではそれ以上この問題に深入りしないことにする。何故ならば、この問題については、フロイトの次の結論を示すだけで十分であると考えられるからだ。

その結論というのは、次のようなことだ。フロイトは「世界の統一的解釈は科学的世界観の将来のプログラムのなかにすえられている」などと意味ありげに論じてはいるが、実は、「科学的世界観」の持主にとって、「世界の統一的解釈」などということはどうでもよい空虚な問題だと考えていたということである。そのことはフロイトの次の言葉からも明らかであろう。

「宇宙がどういうものであるかなどという問題は、知覚する側であるわれわれの心理機構を無視するなら、実際上は何の関心も惹きえない空虚な抽象物である」（参考文献〔I〕、〔II〕、P. 404）。

フロイトは「世界の統一的解釈」などということは「科学」の埒外の問題で、「科学の使命としては、われわれの肉体的条件の特殊性の結果われわれの目には外界がどう映らざるをえないかを示すことに限るだけでなくほぼ充分である」（参考文献〔I〕、〔II〕、P. 404）と考えていたのである。これがこの問題に関するフロイトの結論である。「運命（アナンケ）」とその帰結としての「敵意に満ちた実人生」にもあそばれながら、しかもそのなかでそれに依存して生きていかざるをえない人間は、人間としての「自我」の自立をめざして、科学よって外的現実についてのより正しい知識（「真理」）を手に入れることによって力を得、一步一步「真理」の領域を拡大することによって力を増し、それによって「運命」にたちむかうさらに大きな力を身につけ、自己の力に応じた人生設計をしていく。フロイトはそこに「自我」の自立をめざす「人間の生きる道（倫理）」をみたのである。フロイトにとって「科学」はあくまで「運命（アナンケ）」にたちむかう人間の力の源泉であり、自立をめざして現在をより強く生きるための人間の力以外の何物でも——「統一的世界観」をもとめて「上位の一仮定」を追求するためのものでは——なかったのである。

そしてその上で、フロイトは現在の人間力・知力を超えた「運命の力」——たとえば「死」——に遭遇した場合には、「運命」に柔順に従うことをすすめたのである。

特質7. と特質8. との間に介在するフロイトの「(科学的)世界観」の第2の問題については本稿で詳論したい。その問題を次のように整理してみることにしよう。フロイトには「決定論的世界観」→「心的決定論⁽²⁴⁾」に帰結する次のような人間認識がある。「人間とは、弱い知性を持ち、

(24) 究極の決定因たる「外的現実（物質的自然）」のエネルギーが「生命体→人間」とその「本能（生命エネルギー）」を生んだ。「生命体→人間」の「本能」によって媒介されている肉体および「心的機構」は、「生命体→人間」の「外的現実」への適合のもとに発達したものである。それ故、「生命体（人間）」の肉体と「心的機構」を媒介する「本能は」、心的現象の決定因として作用することになる。それ故、人間の心的現象はすべて、無意識（本能の作用）との因果連関によって説明される、つまり、決定されている。「決定論的世界観」→「心的決定論」の内容は以上のように要約できる。

欲動願望のままに動いている存在だ」(参考文献〔Ⅱ〕、〔Ⅲ〕、P. 398)。人間は「人間獣の子孫」である。もし原始時代の「父親殺し」という行為にともなう「情動的断念」ということがなかったとすれば、今日でも人類は「何の躊躇もなく依然として殺し合いをつづけていることだろう。」(参考文献〔Ⅱ〕、〔Ⅲ〕、P. 393)。「今日の人類の場合ですら、純理性的な動機は、情動的な欲動の前でははなはだ無力である。」(参考文献〔Ⅱ〕、〔Ⅲ〕、P. 393)。

「決定論的世界観」→「心的決定論」に由来するこのような「受動的」な「欲動優位の人間観」をもちながら、はたして、「能動的」な「知性優位の人間」の育成、つまり、受動的な「情動的断念」からの能動的な「知性による断念」への転換は可能なのであろうか。可能であるとするならば、その「受動性」から「能動性」への契機はどこにあるというのであろうか。さらにまた、その契機と可能性を科学(精神分析)は科学的真理として示せるのであろうか。

特質7. と特質8. との間に介在するフロイトの「科学的世界観」の問題とは、正に、この問題に他ならない。

フロイトの、受動的な「情動的断念」の能動的な「知性による断念」への転換という、「知性優位」の思想はその理念・目標が科学的真理として示されないかぎり、フロイトの願望にもとづく「幻想」に終わるのである。

この問題はフロイトの「宗教的世界観」の批判と大きくかかわるので、それを論じたあと、第4章で、あらためて詳論することにしよう。

(いいおか ひでお・本学名誉教授)

参考(引用)文献

- 〔Ⅰ〕フロイト「世界観というものについて(『精神分析入門《続》』、第35講)」『フロイト著作集Ⅰ』人文書院
- 〔Ⅱ〕フロイト「ある幻想の未来」『フロイト著作集Ⅲ』人文書院
- 〔Ⅲ〕フロイト「文化への不満」『フロイト著作集Ⅲ』人文書院
- 〔Ⅳ〕フロイト「戦争と死に関する時評」『フロイト著作集Ⅴ』人文書院
- 〔Ⅴ〕フロイト「快感原則の彼岸」『フロイト著作集Ⅵ』人文書院
- 〔Ⅵ〕フロイト「自己を語る」『フロイト著作集Ⅳ』人文書院
- 〔Ⅶ〕フロイト「自我とエス」『フロイト著作集Ⅵ』人文書院
- 〔Ⅷ〕フロイト「心的人格の解明(『精神分析入門《続》』、第31講)」『フロイト著作集Ⅰ』人文書院
- 〔Ⅸ〕フロイト『精神分析入門(正)』『フロイト著作集Ⅰ』人文書院
- 〔Ⅹ〕フロイト『日常生活の精神病理学』『フロイト著作集Ⅳ』人文書院
- 〔Ⅺ〕フロイト「精神分析学概説」『フロイト著作集Ⅸ』人文書院
- 〔Ⅻ〕フロイト「ハンス少年分析記後日談」『フロイト著作集Ⅸ』人文書院
- 〔Ⅼ〕ピーター・ゲイ、鈴木 晶訳(1997)『フロイト』みすず書房
- 〔Ⅽ〕小此木啓吾(1977)「ユダヤ人フロイト」『現代思想 5, 1977臨時増刊号』青土社
- 〔Ⅾ〕飯岡秀夫(2006)「フロイトの『本能論』－フロイトに於る『心』と『本能』の探求－」『高崎経済大学論集』第48巻第3号
- 〔Ⅿ〕飯岡秀夫(2006)「フロイトの『人間論』－デーモンと自立－」『地域政策研究(高崎経済大学)』第8巻第3号